

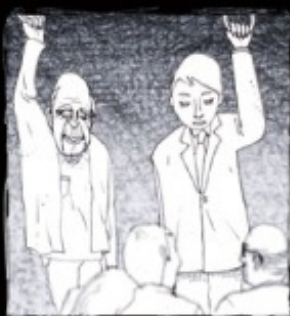
あても
宛なく、
名も無く。





「伝えたい、
伝えたい、
伝えたい。」

「…分かり合いたい。」



ギリギリの想いが、
胸で相変わらず渦を巻く感触を感じたら、
早く安心が欲しくて、
頭から勢いよく布団に潜り込んだ。



今日も手前をうろついて、

きっと、

心の奥底までは自分すら拭いきれなくて、

人と人がいくら挨拶を交わしても

拭き取りきれない部分があって、

水垢のようにこびりつく。



もしかしたら、

この先ずっとこうなのかもしれないと思うと、

さっきまで波打ち際で

パシャパシャやっていた不安が、

猛烈な威力を蓄えて津波のように押し寄せる。



そしたらツライ。
生きるのは単純にツライ。

なんでだよ。

ツライ
じゃねえーか!



飲み込まれるのなんて2秒だ。

それを知ってるのか、

知らないのか、

はたまた知ってるふりをしているのか、

それほど器用でもない僕は、

津波の届かない街で

ギリギリの生活を送っていることになる。



飲み込まれるのは2秒。

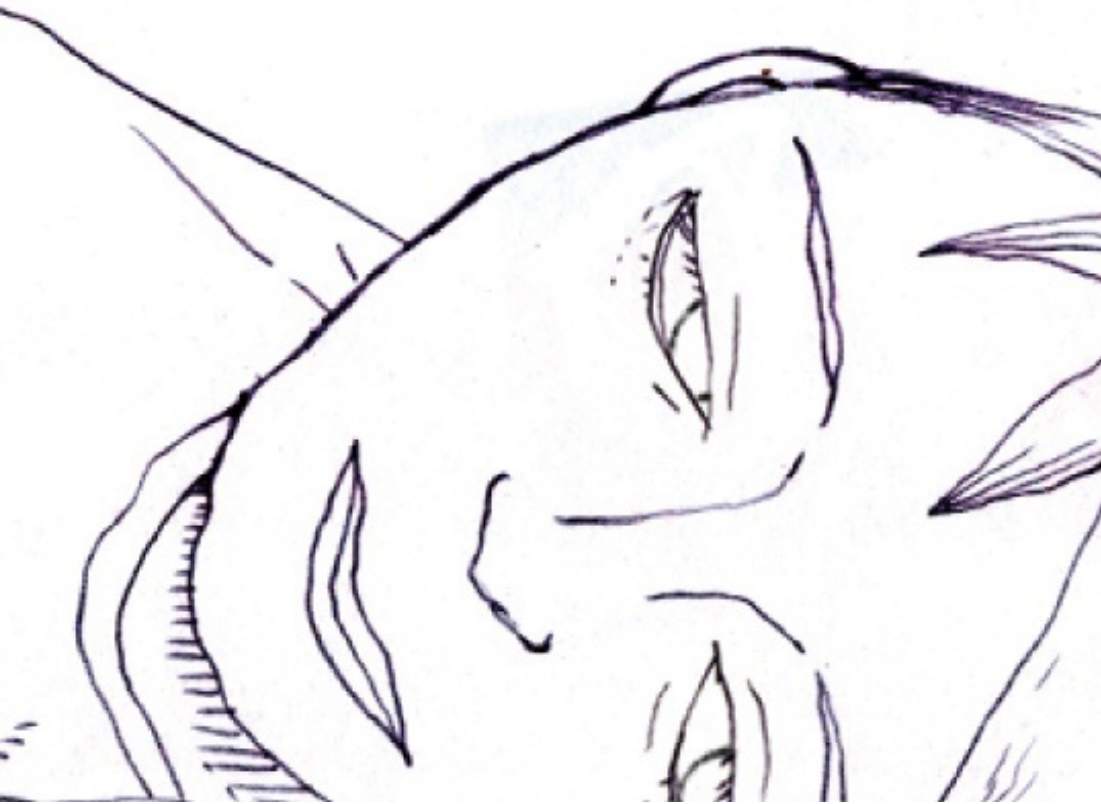
ほんの3メートル先まで

津波は押し寄せている。

きっと僕の鉄の塊に似た重たい心は、

3メートル先の津波の潮のせいで

徐々に錆びてきている。



このまま。

ジリジリ使い物にならない赤茶色の心になって、



だけれども。

いずれはなんらかの方法で、

そう、なんらかの方法で、

津波が静かに去り、

半分になった正常な心を糧に、

もう半分の錆びた心を勲章とし、

保証も無く力強く生きていくか。



はたまた。

2秒で飲み込まれて、
海の底で深海魚とともに
優雅な儚きダンスを踊るかは、



もう、賭けだなと思った。



そして僕はギリギリの街で

今日も息をする。

保証もなく。

性懲りもなく。



僕の心、
鉄の塊に似た重たいもの。
ジェット機。
そう例えてみる。

「伝えたい、伝えたい、伝えたい。分かち合いたい。」